

映画『マレフィセント』における古典的な 価値観崩壊についてのイデオロギー分析

青木 綾羅

序 章

近年のディズニー映画は過去の作品をリメイクして公開される傾向が強い。『クルエラ』(2021)は『101匹わんちゃん』(1961)に登場するクルエラの人生に焦点が当てられた作品であるし、2023年公開予定の『リトル・マーメイド』は『リトル・マーメイド』(1989)の実写版映画である。しかし、リメイク作品の元になる映画が作られた時代の価値観は現代のものと一致するとは限らず、元のストーリーを追うだけでは、現代の大衆に刺さる物語を作ることは難しい。そこで、リメイク作品は当時の作品構造をベースに、新たなエピソードを挿入し現代を生きる観客にとって自然なものとなるように改変される。本論文では、『眠れる森の美女』(1959)と『マレフィセント』(2014)のストーリー変化に着目し、その挿入と改変がどのような意味を含んでいるか明らかにしようとするものである。そのためにまず、『眠れる森の美女』からディズニーが形成した古典的な価値観として、男女のジェンダー格差や悪役であるマレフィセント、真実の愛のキスについて分析する。次に、『マレフィセント』における登場人物の表象が変化したことや、悪役としての

マレフィセント、真実の愛の概念が拡張したことに触れ、新たな描写がイデオロギー的な立場から挿入されたことを明らかにする。最後に、これらの挿入がエイジズムを否定することにつながり、男女平等を求め、愛と性が多様化した現代において有効であるという結論を提示したい。

第一章：ディズニーが形成した『眠れる森の美女』における古典的価値観

『眠れる森の美女』は1959年公開のディズニー長編アニメーション映画で、原作はシャルル・ペローによるヨーロッパの童話である。新しいプリンセス誕生を祝う催しのさなか、悪い妖精で、魔女として恐れられているマレフィセントが「16歳の誕生日の日が沈むまでに糸車の針に指を刺して死ぬ」呪いをオーロラにかける。しかし、三人目の妖精によって死の呪いは眠りへと、そして呪いは愛する人とのキスによって解かれるよう書き換えられた。成長したオーロラは夢で出会った理想の王子様と結ばれることを願っていたが、国王の努力むなしく、呪いの通り16歳の誕生日に指を糸車の針に刺して眠りにつく。しかし、妖精の力を借りたフィリップ王子がドラゴンと化したマレフィセントに立ち向かい討伐。愛する人、フィリップとのキスによってオーロラは覚醒。二人は結婚して幸せに暮らす、というストーリーである。オーロラ姫とフィリップ王子の表象、悪役としてのマレフィセント、キスによる目覚めに着目して、それらが家父長制を元に描写されたことを指摘し、『眠れる森の美女』と『マレフィセント』の比較分析につなげることを本章の目的とする。

1-1: 強調される女性像と男性像

まず初めに、オーロラとフィリップの描写について注目し、どのようなジェンダーバイアスがかけられているかということを確認する。オーロラは生まれた日に美しさと綺麗な歌声を与えられる。物語中では春を纏ったような美しさだと形容され、黄金色の髪に赤い唇、セレナーデのような歌声を持つ。いつか素敵な男性と結ばれることを願っていて、呪いを解くためのキスを眠りながら待つ女性である。一方でフィリップは背が高くハンサムでロマンティック。自らマレフィセントに立ち向かい、ドラゴンを倒しオーロラを助ける勇敢な男性である。ここから見ることのできる男女像は特に女性の受動性、男性の能動性である。フランスの哲学者シモーヌ・ド・ボーヴォワール (2001) も指摘しているように

女は、『眠りの森の美女』、『ロバ皮姫』、『シンデレラ』、『白雪姫』であり、受け入れ耐え忍ぶのだ。歌や物語の中には、危険を冒して女を探しに行く若者が登場する。彼はドラゴンをやっつけ巨人と闘う。女の方は塔やお城、庭や洞窟に閉じ込められている。岩につながれ、囚われの身となり、眠り込んでいる。女は待っているのである。(p. 54)

オーロラは受け身の存在、フィリップは自ら切り開いていく存在として描かれており、呪いによる眠りとドラゴンの討伐によってより強く印象付けられている。

1-2: マレフィセントの醜さについて

物語中では悪役であり、オーロラに呪いをかけ、解呪を阻止するためにドラゴンとなって王子と戦う姿が描かれているマレフィセン

ト。ここでは、マレフィセントが伝統的な家父長制において否定される存在であるということを確認する。そのためにまず、オーロラに授け物をした三人の妖精との対比構造に注目したい。ブルーノ(1978)は『昔話の魔力』の中で

洗礼の式に招かれなかった...という理由で、生まれたあかんぼうの死を願うのは、その妖精が悪い妖精だということを証明する。こうしてペローの物語でも、グリムの物語と同様に、その出だしのところで、(妖精の名付け親、つまり)母親が、いい母親と悪い母親に分けられていることがわかる (p. 301)

と指摘している。「妖精の名付け親」とは洗礼式におけるゴッドマザーのことである。つまり、オーロラに幸せをもたらす贈り物をした三人の妖精が良い母親で、死の呪いを贈ったマレフィセントは悪い母親だということである。作中における両者の見た目に関しても描写の違いがある。三人の妖精は、妖精の姿でも人間の姿でも家庭に尽くす女性のような外見をしている。エプロンを身に着け、頭にはバンダナを巻き、ふくよかな体形である。一方でマレフィセントは人間と同じかそれ以上の等身、緑色の肌に黒色の角と装束で、非現実的に描かれていて、家事をこなす三人の妖精とは対照的な容姿になっている。

次に注目したいのは「十六歳の誕生日に糸車の針に指を刺されて死ぬ」という呪いである。マレフィセントが只の悪者であれば、洗礼式に現れてすぐオーロラを殺し、国を滅ぼせばよかったのであるが、そうはしなかった。本橋(2016)は、妖精二人がオーロラに授けるのは美と歌であるが、マレフィセントの邪魔が無ければ三人目の妖精は長寿を授けようとしていたはずであると主張している。そ

してこれら三つの贈り物が男性中心主義的な共同体が女性に求めるものと一致し、女性の出産能力という家父長制の維持にとって必要不可欠な要素につながるとする。そして、

十六歳という年限をオーロラの人生に対して区切るのは、この娘に外見と歌声の美しさによって男を魅惑する能力は許しなが
らも、十六歳になれば可能になっているだろう生殖の能力によ
る男性との性交を通して妊娠出産するという計画を邪魔して、
次代の家父長制の存続を不可能にするという意味合いがあるか
らではないだろうか (p. 51)

と指摘する。この物語は家父長制を前提としたオーロラとフィリップの結婚、子供を産んで国を繁栄させ、いつまでも幸せに暮らすという結末に向けて進行する。つまり、糸車の呪いは家父長制をベースとした物語の構造を打ち切ってしまうという点において家父長制を否定するのである。また、本橋 (2016) はマレフィセントが用いた糸車に関して、優れた糸の巻き手を表現する *spinster* という英単語が、独身を貫き自立して生きていく女性を意味すると同時に、「婚期を逃してしまった独身女性」(p. 55) という意味を持つことにも着目した。独身で家庭を感じさせない出で立ちであるマレフィセント自身が婚期を逃し、結婚して家庭を築くという家父長制的な幸せを手に入れることができなかったからなのではないだろうか。よって、マレフィセントは打倒すべき悪として、家父長制のアンチテーゼ的存在として表象されるのである。

1-3: 呪いを解くための愛

この物語の中で呪いを解く方法は心から愛する人とのキスで、これは三人目の妖精、メリーウェザーによって追加された解呪の方法である。本橋 (2016) はこの贈り物と、眠ってしまったオーロラを妖精が寝室に連れて行ったことに関し「寝て待つ女と障碍を越えて来る男というステレオタイプを再生産する」(p. 66) と指摘しており、妖精が家父長制を後押ししているような様子を見ることができる。ここで着目したい点はオーロラとフィリップは許嫁関係であり、一緒に歌って踊っただけで呪いを解く条件としての愛を達成する、という点である。歌とダンスだけで相手を心から愛することができるだろうか、二人の間で育まれた愛情関係はほぼ存在しないに等しい。それにもかかわらず愛が認められ呪いを解くことができたのは、そのキスが「未婚のプリンスによる結婚と生殖を前提とした身体的接触」(本橋、p. 51) であり、その後の跡取りの出産から国の発展まで、家父長制の存続を暗示しているためである。つまり、結婚と出産が約束されたこの真実の愛は、キスの段階では不確定だが、家父長制の維持に必要なはずの異性間の愛を重要視していると言える。

上述した三つの観点は人々を大きく支配し、現在に至るまで一定数の支持を得ている。若桑 (2003) は「ジェンダーは、長い歴史を持っており、しかも複雑で大規模な構造なので、私たちはそのなかにとっぴりつかって生きている。だから、それはまるで自然で運命的な人類のありかたのように見える」(p. 14) とし、現代においてもその構造は大きな支配力を持っており、我々にとって当たり前のことであると指摘している。また、有馬 (2001) によると『眠れる森の美女』のヒロインはこの時代におけるアメリカ社会とウォルトの女性観、両方を反映したものである。そのため家父長制的な価値

観がディズニー映画によって、より大衆に浸透したとすることができるのだ。

本章の結論として、特にオーロラとフィリップにより強調される女性の受動性と男性の能動性、マレフィセントのような悪役は打倒されるべき存在だという点、真実の愛とは男女間に形成されるものであるという観点が、ディズニーによって形成された家父長制を基盤とした「古典的価値」であるとする。

第二章：『マレフィセント』における新たなストーリー

本章では『マレフィセント』における男性像と女性像、人間的な存在へと変化したマレフィセント、新しい形の「真実の愛のキス」に着目する。第一章で分析した事項と比較し、新たな描写はイデオロギー的な立場からの挿入であり、現代的な価値観が提示されたということを明らかにする。

『マレフィセント』は2014年公開の実写映画である。『眠れる森の美女』（1959）では描写が少なかったマレフィセントとその過去にフォーカスを当てた作品である。妖精の国に住む若かりしマレフィセントは人間の男、ステファンと出会う。年月をかけて二人は愛を育み、マレフィセントが16歳になった日にステファンは真実の愛のキスを贈る。しかし、王の座に目が眩んだステファンはマレフィセントに睡眠薬を飲ませ、彼女の翼を切り落とす。時を経てオーロラの洗礼式。マレフィセントはオーロラに「美しく優しく誰からも愛される娘に育つが、16歳の誕生日の日が沈む前に糸車の針に指を刺して死んだように眠りにつく。そしてその眠りを覚ますのは真実の愛のキス」という呪いを贈る。フィリップ王は恐怖と怒りでマレフィセントへの復讐に取りつかれる。一方マレフィセントはオー

ロラの成長を見守り呪いを消そうと試みるが、オーロラは糸車の針に指を刺して眠りについてしまう。マレフィセントが森から運んできたフィリップ王子のキスでは呪いを解くことはできず、オーロラはマレフィセントのキスによって目覚める。城に飾られていた翼を取り戻したマレフィセントはステファン王を倒し、オーロラは妖精の国の王女となる。作中のナレーターが自分こそ眠れる森の美女であるためにこの話を知っていると明かし、物語は終わる。

2 - 1: 『マレフィセント』における女性像と男性像

前作においては女性の受動性と男性の能動性が強調されていた。ここでは、本作におけるオーロラとフィリップの描写について前作と比べて変化した点を確認する。オーロラの美しさには変わりはないが、彼女は16歳の誕生日を待たずして妖精の元を離れ、マレフィセントと共に暮らすことを決意する。自分のことは自分でできる、として自らの意志でマレフィセントと妖精の国で過ごしたいと主張し、生まれて間もない頃から寝食を共にした三人の妖精に自立を求める姿が描かれている。ただ眠りながら誰かの助けを待ち、いつか夢で見た王子様が目の前に現れることを楽しみにしている受動的な女性ではない。一方でフィリップに関しては、オーロラが眠る部屋までは魔法で眠らされた状態でマレフィセントに運ばれ、キスをしてでも呪いを解き目覚めさせることができなかった。『眠れる森の美女』で描かれていたようなドラゴンと茨の森へ勇敢に立ち向かい、自分で道を切り開いていく能動的な男性には見えず、役立たずで頼りない印象を受ける。

次にマレフィセントとステファンの表象について『眠れる森の美女』とは異なるポイントが強調されていることを確認する。まずマレフィセントに関しては、彼女と三人の妖精の魔法について注目し

たい。前作においてもマレフィセントの魔法は強大なものであるとされてきたが、今作ではより力の大きさが強調されている。妖精たちの魔法は人間としての生活を補助する能力として描かれていることが多い。彼女たちは人間サイズに大きくなり、その魔法は部屋の掃除や裁縫、コミュニケーションの手段としてのいたずらに用いられている。一方でマレフィセントは物質の構成を根本から変えてしまうような魔法を使う。植物の大きさを自在に操って国を囲うほどの壁を作り、カラスを人間ヘドラゴンへと他の生物に変身させる。また、三人の妖精が小さな羽で空中を飛ぶのに対して、マレフィセントの翼は身体全体を覆うほど大きく、翼で起こした風は襲い掛かってくる兵士を吹き飛ばすほど激しいものである。

加えて、マレフィセントは前作の中で、緑色の肌を持ち悪い妖精の姿としての邪悪さが描かれていたが、本作では主演のアンジェリーナ・ジョリーの美しさを最大限に発揮した描写となっていた。その描写中で注目すべきは、彼女の高い頬骨である。実際にメイクを担当した一人である Arjen Tuiten (2014) は ■She's basically a fantasy creature, but it still had to be very beautiful, you know? It couldn't just be effects with silly, heavy makeup.■ であり、■We didn't want to make her a caricature■ と述べる。マレフィセントのメイクや頬骨は人工的に形作られたものであるが、それは邪悪な妖精としての人間離れした様子や醜さを強調するものではない。Spencer Kornhaber (2014) は

It makes sense that Tuiten & co. chose to highlight the cheeks, rather than, say, the chin, to make Jolie appear strange but not ugly. Research has shown that high, defined cheekbones are perceived to be more attractive in females,

and evolutionary biologists say that's because those features correlate with reproductive ability.

であり、■Research has shown that high, defined cheekbones are perceived to be more attractive in females■だと指摘する。高い頬骨は主演女優とマレフィセント自身が持つ本来の美しさと魅力を発揮することが目的のものであった。マレフィセントの邪悪な性質はそのままであるが、強調されるのは強く美しい姿であり、それが彼女をこの物語の主役たらしめる所以となっている。前作の男性を待つ受動的な女性像だけを見ることはできないのだ。

ステファンは前作の中ではオーロラの呪いを悲しみ、16年間オーロラの無事を確認して安心し、帰ってきた際には喜びの表情を見ている。国を治める王として、娘と離れ離れになった父親としての威厳と愛情を持った、ふさわしい振る舞いをしていた。しかし、今作では自滅の道を進む男性として描かれている。自分の娘を森の中へ隠してからは城の中に閉じこもり、マレフィセントへの怒りに心を燃やし続けた。オーロラを思い出して心配するたびに、自分自身がマレフィセントを裏切ったから娘は呪われたのだという自責の念に苛まれるため、オーロラを心配する気持ちよりもマレフィセントからの復讐と人間の国への侵攻を恐れる気持ち、そして怒りがより強まっていく。そして日を追うごとに弱っていく姿は、もはや威厳のある王ではない。恐怖のあまり、深夜にもかかわらず鍛冶師に重労働を強いるほど錯乱してしまう様子からも、王として、父としての責務を全うしていると言うことはできない。

2 - 2 : 悪役としてのマレフィセントが人間的な存在へ

前作のマレフィセントは物語の中で、完全なる悪役であり、打倒

されるべき存在として描かれていた。しかし、今作のマレフィセントを悪役だと言い切ることは難しい。彼女がオーロラにかけた呪いはステファンの裏切りが原因であり、呪いをかける正当性が明らかになったからである。ここでは、彼女の過去にエピソードが挿入されたことによって、マレフィセントが単純な悪役ではなく、複雑で人間的な存在へと変化したという点について述べる。

洗礼式におけるマレフィセントの眠りの呪いは前作も今作も、跡継ぎを産んで国の発展を繰り返すサイクルの存続を不可能にする、という点において家父長制に否定的な立場である。それと同時に、呪いに用いられた糸車に関しては「紡錘が男性性器であることはまず疑いがなく、出血は処女の喪失であることも疑いはない」（若桑、2003, p. 150）。また人類学者の Laura Carpenter（2009）は ■The idea that virginity has a high value harkens back to the days of early humans■ とし、■Through the 1950s in America, women were expected to remain virgins until marriage■ であるから、結婚まで処女を保つことは重要であったと主張する。結婚前の女性がそのような「暴行であり、レイプである」（若桑、p. 150）仕打ちを受けることは、女性としての価値をゼロにするものである。オーロラは結婚前であるために、処女であることは価値を保つという意味で必要なことだった。しかしながら、オーロラは糸車の呪いによって針を刺され出血、疑似的に暴行されレイプを受けた状態である。彼女の女性としての価値が呪いによって奪われたことに加え、その価値の喪失が男性と結婚することを難しくさせるという意味において家父長制の存続に危機をもたらすため、マレフィセントは邪悪な存在であり、悪役だったのである。しかし、ステファンがマレフィセントに薬を飲ませ、翼を切り落としたこと、この出来事は ■Now Jolie has confirmed that the scene deliberately echoes the too-

familiar beats of the date-rape narrative.■ (Rich, 2014) であり、こちらもレイプの隠喩としての表現だと明言されている。そしてレイプした後に彼が戻ってくることはなく、そのまま王家に婿入りして国王の座を得た。そもそも、マレフィセントは妖精の国の実質的な支配者であり、ステファンと結婚することができたならば妖精の国と人間の国、双方の発展を担うことができるはずの存在であった。しかし、ステファンがマレフィセントを捨てたことによって純潔は消え、彼女は女性としての価値を失ったのだ。

この出来事を踏まえると、「ステファンが裏切りによって獲得した王国と妻の象徴である直系の娘を永遠に眠らせなくてはならない、というマレフィセントの復讐が論理的に導き出される」(本橋、2016, p. 123)。マレフィセント自身が経験した処女の喪失と裏切られた絶望を、オーロラの呪いという形でステファンに復讐するのである。かつて愛した者からの報復と大切な物を奪われる絶望をステファンに与えることができ、それはマレフィセントが味わった苦痛と同等のものである。そこには自分と同じ苦しみを相手にも与えたいという心理が働いていると考えることができるため、マレフィセントの呪いは正当な理由を持った。このことからマレフィセントが『眠れる森の美女』で表現されていたように、洗礼式に招かれなかったという理由だけで生まれたばかりのオーロラに呪いをかけた悪役である、と言い切ることはできないのである。

2-3: 真実の愛のキスが持つ意味の拡張

ここで注目する点は、真実の愛という概念が拡張したことである。前作における呪いを解く方法は、家父長制に基づいた異性間のもの、フィリップ王子からオーロラへのキスであった。しかし今作でフィリップのキスに効果はなく、代わりにマレフィセントのキスによっ

て呪いは解かれた。家父長制の存続に役立たない同性間の愛が解呪の方法として認められたのである。本節では、マレフィセントにとっては憎しみの対象であったオーロラと、オーロラにとっては赤の他人であるマレフィセントの間において、どのような関係で家父長制を前提とした男女間の愛に匹敵するものが生じたかを明らかにする。

本橋 (2016) は呪いを解く条件としての真実の愛が確定的になった瞬間を、マレフィセントがオーロラの目の前に自身の姿を露わにし、オーロラがマレフィセントをあなたは私のフェアリーゴッドマザーだと呼ぶときであるとする。そして

たとえ血の絆が存在せずとも、また育てる意志など全くなくても、ともに過ごしてきた時間が家父長主義の権力制度を一気に凌駕し、決定的な相互認識が果たされる。母親でもなく、乳母でもない、家父長制度内の養育関係からは完全に逸脱した、疑似養育母的な関係による、愛情の結実 (p. 126)

があったとし、マレフィセントがオーロラに向けていた憎しみと複雑な感情が解消され、結果としてそれが愛情に変わったと指摘する。三人の妖精の代わりに、陰から成長を見守って手助けをするうちに、マレフィセントはオーロラに対して育て親のような感情を抱くようになる。しかし、オーロラが16歳まで無事に成長し、呪いを達成することこそがステファンへの復讐であり、マレフィセントの悲願であった。それにもかかわらず、オーロラはマレフィセントのことを、自分を常に見守ってくれる守り神のような存在、フェアリーゴッドマザーであると形容する。オーロラがマレフィセントの存在に気づいていたこと、お互いが大切な存在同士であったことを認識した時に初めて、不確かだったマレフィセントの感情がオーロラへ向き、

お互いがお互いを大切に思う愛情が完成したのである。この愛情はマレフィセントにとってはステファンへの復讐を諦め、呪いを解こうとするほど重要なものであった。よって今作の真実の愛は家父長制に基づく男女の愛ではなく、過去に積み上げてきた関係性を重要視していると言える。育て親と娘という疑似的な親子の愛が呪いを解く鍵となったのだ。

女性は美しく力を持っていて自由であり、男性は無能であるというジェンダー観の強調、マレフィセントには呪いをかけた理由があったように悪役がすべて打倒されるべき悪ではないということ、真実の愛は家父長制を前提とする異性同士のものには限らず同性の間であっても認められる、という現代的な価値観が新しいエピソードの挿入により提示されたことを本章の結論としたい。

上述した『マレフィセント』における3つの変化は、現代社会における価値観が『眠れる森の美女』公開当初のものから変化し、イデオロギー的な立場からのエピソード挿入や変更があったことを表している。次章ではこのような変化がもたらされた理由について分析する。

第三章：イデオロギー的立場からの考察

さて、これまで『眠れる森の美女』と『マレフィセント』を比較し、それぞれの作品で強調されるジェンダー像、悪役マレフィセントが持つ性質、呪いを解く条件としての真実の愛、この三点の変化について分析してきた。そしてこれらの変化をもたらした新たなエピソードはイデオロギー的立場から挿入されたものであり、現代社会からの大きな影響を受けていることがわかった。本章では『マレフィセント』が虐げられて傷ついた過去を乗り越え、自分自身を取

り戻す物語であることから、エピソードのイデオロギー的な挿入がエイジズムの否定につながり、男女平等を求め、愛と性の形が多様化している現代において有効であるということを明らかにする。

3 - 1 : エイジズムの否定

ここでは、オーロラの美貌とマレフィセントの邪悪さ、ステファン王の描写の違いを比較し、変化したマレフィセントとステファン王の性質がエイジズムの否定につながるということを主張する。まず、エイジズムとはどのようなものであるか、アードマン・B. パルモア (1995) の『エイジズム 優遇と偏見・差別』から引用する。

エイジズムはある年齢グループに対する否定的、肯定的偏見ないし差別である。年齢グループに対する偏見は否定的なステレオタイプもしくはそのグループに対する否定的な態度である。年齢グループに対する差別とは、その年齢グループへの否定的対処である。(p. 19)

そして「ステレオタイプとはある集団 (高齢者) に対する誤解もしくは誇張された否定的見方」(p. 22) であり、「否定的態度とは高齢者集団に対する否定的な感情」(p. 22) であると指摘する。より簡潔な例を取り上げると「社会的なステータスの上がりとして、長老という権力を手にする (そして失う) 男性と、美 = 若さという『魅惑の資源』を使い果たしてしまう女性」(樋口、1992, p. 1) という考え方が年を取った男女に対するエイジズムである。

第一章で確認したように、『眠れる森の美女』におけるマレフィセントは家父長制のアンチテーゼ的存在であり「婚期を過ぎてしまった独身女性」(本橋、2016, p. 55) の性質を持っていた。そしてそ

の邪悪さは物語の構造を否定するという立場から打倒されるべき悪として、オーロラが持つ家父長制を維持するために最適な若さや美貌との対比的な構造であるため、マレフィセントはエイジズムの対象だった。しかし、『マレフィセント』において強調される彼女の性質は、頬骨や大きな翼、魔法のように自分自身の生活や経験を根拠にする美しさと力強さである。男性を誘惑するための若さに裏打ちされた美しさではなく、自分自身の強さを表現するための美しさをマレフィセントは持っていた。前作でオーロラは家父長制において重要視される若さとそれに伴う美しさを持っているからこそ、真実の愛を手に入れることができた。しかし、今作ではその愛をマレフィセントも獲得している。年をとった女性は女としての資源を失い、幸せになることはできないというエイジズムの対象であっても、ステファンへの復讐心を溶かし、愛するオーロラと妖精の国で暮らすというハッピーエンドの結末にたどり着くことができたのである。

ステファンに関して『眠れる森の美女』では王として娘の許嫁を決めるという政治的な権力を最大限に活かす威厳や寛大さ、前述した引用の言葉を借りると、「社会的なステイタスの上がりとして」の「長老という権力」を持っていた。しかし、『マレフィセント』におけるステファンは年齢を重ねるごとに増していくはずの権力や威厳は感じられず、復讐されることを恐れ、耄碌した姿しか見ることができない。自分自身がマレフィセントに犯した過ちとオーロラへの懺悔を反芻し、頭の中が恐怖と怒りで満たされていくからである。このように、マレフィセントは年をとっても幸せで肯定的な姿を、ステファンは不幸で否定的な姿を表現することで、本来エイジズムの対象となっているはずのマレフィセントの否定的偏見、ステファンの肯定的偏見を逆説的に表現している。アードマン (1995) はエイジズムの解消にむけて、映画等のメディアは否定的なステレ

オタイプに対抗する手段として大きな力を持っているとした。加えて、意図的にエイジズム対象となるキャラクターの肯定的な姿を見せたり、否定的側面と肯定的側面をバランスよく配分したりすることで、否定的なエイジズムが持つ、必要以上に小さく利点を扱うという不均衡さを無くすことができると指摘する。このことから、マレフィセントが年齢を重ねても美と強大なパワーを維持している姿、ステファンが復讐と怒りに燃えて没落していく様子は『眠れる森の美女』で現れていた婚期を過ぎた女性は役に立たない、という否定的なエイジズムの不均衡を解消することにつながる。また、家父長制にとって利点となる、若さを良いものとして老いを悪いものであるとみなすエイジズムを否定することもできるのだ。

3-2：愛と性が多様化し、男女平等を求める社会において

最後に、マレフィセントがかけた呪いを解く条件「真実の愛」の意味が拡張した点と、物語中で強調されているジェンダー観が変化したことに着目し、この拡張と変化がクィア・セクシュアリティの観点からの愛と性が多様化し、男女の平等を求める現代社会において有効であるということを指摘したい。

『眠れる森の美女』に限らず、ディズニーが作った呪いを解くための条件は男女間での真実の愛、そしてそれに伴うキスであった。それは、家父長制をベースとする大きな構造が物語を支配していたからである。

家父長制の構造に関する最近の、最も有益な論文がほとんど例外なく示唆しているように、男性中心の親族体系には「強制的異性愛」が組み込まれている、あるいは異性愛結婚という父権的な制度においては、同性愛は必然的に嫌悪されることになっ

ている (セジウィック、2001, p. 4)

ため、プリンセスにとって真実の愛のキスは、いつか王子様がくれる幸せの印であると定義づけられることも、ハッピーエンドへと向かうフィナーレとして広く受け入れられることも当然の事であった。しかし『マレフィセント』で呪いを解くのは、オーロラとマレフィセントの愛である。『眠れる森の美女』の物語をベースに作られた作品において、異性愛ではなく同性間の愛が真実のものであるとして、効果を発揮した。男女が結婚して子供を産み、国を発展させるための愛が幸せな人生につながるとされてきた物語の中で、幸せなエンディングとして異性間の愛も認められたのだ。

更に、この拡張は男女の平等を求めるという意味でも有効であった。フィリップによる真実の愛のキスが条件として受け入れられなかったことについて着目したい。2017年11月にイギリス在住のサラ・ホールは「眠っていて意思がない女性にキスをするという行為が、『相手の同意なしに性的行為に及ぶ』というレイプの根本的問題と重なると問題提起」した。また、社会学・ジェンダー研究者の牟田和恵は同年12月に、電車で眠る女性に男性がキスをして逮捕された事件を受けて「白雪姫とか眠り姫とかの『王子様のキスでお姫様が長い眠りから目覚めた』おとぎ話、あれも、冷静に考えると、意識のない相手に性的行為をする準強制わいせつ罪で」はないかと指摘した。『マレフィセント』においてフィリップはオーロラにキスをして、オーロラを目覚めさせるには至らなかった。同時に、その行為自体が無意味なものであったため、眠っている女性にキスをしたことに対する肯定的な印象は無い。確かに、オーロラがキスをされたのはおとぎ話の世界であるため、現実世界の同意なしの性行為が準強制わいせつ罪の考えを持ち込むのはいささかナンセンス

だと言うことができるかもしれない。しかし、第一章で確認したように女性の受動性が強調されている『眠れる森の美女』のジェンダー観が何の疑問もなく人々に受け入れられていることに対して『マレフィセント』は反対の立場をとっている。そのため、女性の立場を男性と対等にするという点において、この観点は重要な意味を持つのである。

また、『眠れる森の美女』では女性と男性の古典的なジェンダー観が強調され、女性は受動的で男性は能動的、そしてマレフィセントは悪役であり罰するべき存在であるとして男女と善悪の対立が明らかにされていた。しかし『マレフィセント』では、女性は大きな翼が象徴するような自由を持っている存在、男性は権力と地位を手に入れるためには手段を選ばない強欲さを持っている存在、として描かれ、マレフィセントは完全な悪役から人間的な存在へと新たな解釈に、元々あった男女と善悪の二項対立は崩壊した。必ずしも女は受動的ではなく、男は能動的ではない。そして、洗礼式で家父長制に肯定的な贈り物をした三人の妖精が必ずしも善であるというわけでもなく、呪いを贈ったマレフィセントが倒されるべき悪であると言い切ることもできない。眞野 (2020, pp. 26-27) は性的マイノリティへの差別が起こる理由として、人々が男女間以外の性愛の形が自然ではないという考えの異性愛規範や、女性と男性に対するステレオタイプの価値観であるジェンダー規範を人々が内面化することによって、その規範から外れることを恐れたり嫌ったりすることで現れるとする。原作版やその他多くのディズニー作品は、物語の幸せな結末は家父長制に基づいた男女の愛であることを繰り返していた。その中でオーロラとマレフィセントの疑似的な親子の愛情も幸福になるという結末を提示することは、人々が内面化してきた規範を揺らがせて、議論を引き起こし、今までとは異なる視点からの

観察を促すのである。

荻上 (2014) は「ディズニー映画はこれまでも、原作や過去作品の物語世界への応答、もしくは現代社会からの要請に応じて、物語の世界観やキャラクターの描き方などをアップグレードしてき」(p. 71) とし、新たな映像作品を作ることは、数多く存在する過去作に対して、新しいクリエイターが挑戦し、自分たちの描き方を現代の観客にアピールするものであると指摘する。このことから、オーロラとマレフィセントの愛が真実であると認められたことは、それが愛と性の多様化を求める「現代社会からの要請」に応じて『眠れる森の美女』の世界観やキャラクター像がアップグレードされて、作品作りに携わった人々の解釈が今を生きる人々へ提示されたと言いうことができる。年齢を重ねても力と美を保持するマレフィセントと、老いぼれて衰弱していくステファンの表象が家父長制に有利性をもたらすエイジズムの否定につながるということに加え、男女の愛こそ幸せをもたらすということの象徴であった真実の愛が、疑似的な母と娘の愛も幸せな結末につながることを認めたこと、キャラクターの表象やマレフィセントの過去により男女や善悪の二項対立を崩壊させたことが現代社会に生きる人々が持つ常識をゆすり、性的マイノリティや男女間で生じる格差是正を求める現代において有効である、ということ本章の結論としたい。

結 論

ここまで、『眠れる森の美女』と『マレフィセント』での表象に着目し、新しいエピソードの挿入によるキャラクターが持つ性質の変化は何を意味するかについて分析してきた。『眠れる森の美女』においてディズニーが形成した古典的な価値観は家父長制に基づく

ものであり、当時から現代に至るまで人々の考えに影響を与えていた。しかし、それらの価値観は『マレフィセント』において現代的にアップデートされ、古典的な価値観とは対極的な表現をスクリーン上で描写することによって、現代の人々の価値観が変化したことを表した。そして、それらの新たな価値観はエイジズムを否定し、男女平等を求め愛と性が多様化した現代において有効であるということがわかった。今後も数多くのリメイク作品が公開される。その中でも何が変化し、どのように表現されているかに着目することで、様々な角度から作品の分析をしたいと思う。

参考文献

図書資料

- 有馬哲夫 (2001) 『ディズニーとは何か』、NTT 出版
- 荻上チキ (2014) 『ディズニープリンセスと幸せの法則』、星海社
- セジウィック, K. イヴ (2001) 『男同士の絆 イギリス文化とホモソーシャルな欲望』、上原早苗・亀沢美由紀訳、名古屋大学出版会
- バルモア, P. アードマン (1995) 『エイジズム 優遇と偏見・差別』、奥山正司訳、法政大学出版局
- 樋口恵子編 (1992) 『エイジズム おばあさんの逆襲 (ニュー・フェミニズム・レビュー 4)』、学陽書房
- ブルーノ, ベッテルハイム (1978) 『昔話の魔力』、波多野完治・乾侑美子協訳、評論社
- ボーヴォワール, ド・シモーヌ (2001) 『決定版 第二の性 体験上』、『第二の性』を原文で読み直す会訳、新潮社
- 眞野豊 (2020) 『多様な性の視点で作る学校教育 セクシュアリティによる差別をなくすための学びへ』、松籟社
- 本橋哲也 (2016) 『ディズニー・プリンセスの行方：白雪姫からマレフィセントまで』、ナカニシヤ出版
- 若桑みどり (2003) 『お姫様とジェンダー アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』、筑摩書房

WEB 資料

Wischhover, Cheryl. "What It Took to Turn Angelina Jolie Into Maleficent - Fashionista." Fashionista, 19 May 2014, Accessed 21 December 2022,

<https://fashionista.com/2014/05/maleficent-makeup-costumes>.

Landau, Elizabeth. "What Is Virginity Worth Today? - CNN.Com." CNN International - Breaking News, US News, World News and Video, CNN, 22 Jan. 2009, Accessed 21 December 2022,

<http://edition.cnn.com/2009/LIVING/01/22/virginity.value/>.

Rich, Katey. "Angelina Jolie Confirms Maleficent Rape Scene | Vanity Fair." Vanity Fair, Vanity Fair, 12 June 2014,

Accessed 21 December 2022,

<https://www.vanityfair.com/hollywood/2014/06/angelina-jolie-maleficent-rape>.

牟田和恵 (@peureka)、2017-12-11 22:46, Accessed 21 December 2022,

https://twitter.com/peureka/status/940216308745961473?s=20&t=bFD5fs12hJpu_Rn_Ooomg.

———. “『眠れる森の美女』のある場面が「レイプを容認」と母親が訴え フロントロウ 海外セレブ & 海外カルチャー情報を発信.” フロントロウ, 25 Nov. 2017, Accessed 21 December 2022,

https://front-row.jp/_ct/17133211.

映像資料

ストロンバーグ、ロバート 『マレフィセント』、ディズニー、2014年

ピーターソン、ケン 『眠れる森の美女』、日本 RKO、1959年